

学習支援センターニューズレター

第2号

発行：平成25年9月1日 埼玉工業大学学習支援センター運営委員会

第2号 目次

巻頭言「学校教育の意義」	… 1
コラム「分からないことを大切に」	… 2
コラム「基礎・基本がなぜ必要か」	… 4
学習支援センターのご案内	… 7

巻頭言

学

学校教育の意義



学習支援センター長 小西 克享

人間には本来知的好奇心というものがあり、それまで知らなかったことを知った時に、驚き、感心、感動、喜びといった感情を味わいます。内容が興味のある対象であればあるほどそれらの感情は強く現れ、一方で関心がなければ何も感じないということもあります。

学校での勉強に目を向けると、誰しも幼稚園以来様々な学習を通していろいろな知識を獲得してきたわけですが、そのことに喜びを感じている人はあまりいないかも知れません。学校で学ぶ教科にはあまり関心がない、学ぶ意味がわからないなど理由は様々ですが、いずれにせよ自ら学ぶのではなく、学ばされているという意識が邪魔をして、喜びが感じられなくなっているのです。

授業で先生の説明が理解できない、問題が解けない、かといって自ら予習・復習をする気はしない、問題の解き方を誰かに聞く気もしないという悪循環が「勉強は嫌い」という固定観念を生み出します。解けなかった問題が解けたとき、本来はささやかな喜びを感じるものですが、そのような体験がなければ、勉強に興味はわくはずありません。勉強が楽しいと感じることは少なく、むしろ苦痛に感じることの方が多いと言えるでしょう。苦痛であればあるほど、あえて苦痛に立ち向かい勉強する気にならないのは当然です。

では、何のために勉強するのでしょうか。大学受験や何かの資格を取るという目的があれば、勉強する理由は明確です。また将来、特定の職業に就くことがわかっているならば、その職業に必要な知識を集中的に学び、必要な訓練をすることができます。でも、一般的には将来のことなど誰にもわかりません。わからない以上、言語能力、判断力、数的処理能力など人間の脳に備わっている様々な能力を高め、個人個人の可能性や適合性を見出す作業が必要になるのです。そのような訓練を経験すれば、自分に適した職業を自然に選択することができるようになります。それが学校教育の大きな目的のひとつと言えます。

一方、必要以上にアルバイトに精を出したり、インターネット（ゲーム）に依存した生活を送ることにより勉強から遠ざかったりすると、自ら将来の可能性をどんどん狭めることとなります。いったん勉強から逃げる癖がつくと、将来社会人となったときに遭遇するかもし

れない難しいことや努力が必要なことはすべて避けて通らざるを得なくなります。新たなこのことに挑戦する気は失われ、努力せずにできる範囲でしか物事を考えなくなります。体力や元気は必要ですが、世の中は体力さえあればすべてうまくいくというほど甘くはありません。知力が伴わないと仕事の幅を狭め、チャンスを失うことにもつながります。

学習支援センターでは、高等学校の復習を含め様々な学習の機会を提供しています。センターを利用することで勉強の遅れを取り戻し、自信をつけて大学の講義を聴くこともできます。本センターは昨年度に学習支援室から改組された新しい組織ですが、前年度前期の利用者が262名であったのに対し、今年度前期は665名と前年度比で2.5倍に増加しています。本センターが入学前教育および新入生統一テストの一部を担当したことで、新入生への認知度が高まったこともあり、特に1年生の利用者が前年度前期107名に対し、今年度は509名と前年度比で4.8倍もの大幅な増加となりました。まだ一度もセンターを利用したことのない学生の皆さんも、センターに足を運んでみてはどうでしょうか？後期には学習相談やセミナーだけでなく、いろいろなワークショップも開催される予定です。学習支援センターの教職員一同は学ぶことの意味や楽しさを学生の皆さんに是非伝えたいと願っています。

コラム

分

からないことを大切にする



副学長兼学生部長 小野 広明

教員から間違いを指摘されると「傷つく」？

学生のみなさんは授業中に教員から、例えば漢字の誤読・誤記、言葉の意味の誤解などの基本的な事項の間違いを指摘されると恥ずかしいと思うでしょう。「勉強不足だなあ」と自分に対して悔しい気持ちになる人もいると思います。授業というものは、学生の知識等に何らかの間違いがあれば、教員がそれを指摘して是正させる場でもあります。ましてや学生は勉強するために授業に出席しているわけですから、指摘を受けることは授業の基本的な約束ごとです。

しかし、みなさんの中には、「授業中他の学生の前で、教員から間違いを指摘されると本人は『傷つく』ので、授業中はそのままにしておき、授業が終わった後に学生をそっと呼び出して教えてあげるべきではないか」という意見をもっている学生もいます。私の学生時代を思い起こしても、間違いの指摘を受けることは当たり前のことであつたので（いまでも当たり前のこととっていますが）、私は「傷つく」という学生の意見に接したとき、正直あつけにとられてしまいました。それはともかく、私はそうした意見をもっている学生に話をしたことがあります。少し長くなりますが、以下に再現してみます。

指摘は学生みんなのためになる

「漢字の読み方など基本的なことを間違えたら、これからも教員として当然正しい読み方などを教えるよ。授業態度についてもね。指摘を受けなければその人の間違いはこれからも続くよ。社会に出てからもね。学生のときと違って、社会ではあまり指摘してくれないことが多い。間違っただままでいると、将来それこそ恥ずかしい思いをすることがある。私も就学時代を通じて、多くのことを教員から指摘され、その都度一步一步前に進むことができたと思う。私はもし間違いを指摘しない教員がいるとしたら無責任だと思うね。学生のためにならないからね。

それから『授業中ではなく後で学生を呼び出して教えてあげたら』ということについて言えば、授業中に指摘するのは、漢字の読み一つとっても読み誤りやすい漢字というのがある

ように、間違いというものは特定の人だけではなく多くの人に起こるからだよ。また、その場で指摘しなければ授業を受けているほかの学生も誤読などの間違いを引き継いでしまう可能性があるんだ。つまり、ある一人の学生を指導することは、『みなさんも、正しい読み方を覚えましょう』と全員を指導しているのと同じことなんだ。だから、授業中に誤りを指摘されたりすることを恥ずかしがらない方がいいよ。自分が鍛えられるだけではなく、みんなのためにもなることなんだから。お互い様ということだ。それが授業だし、勉強というものだよ。

私が学生に話したことは以上のとおりですが、みなさんはどう思いますか。

指摘されることは有り難いこと

私は、教員から間違いを指摘されることは、「傷つく」どころか、自分が分かっていないことを教えられるとても有り難いことだと思います。それを「傷つく」ととらえるか、「勉強になる」ととらえるかで、学びのありようがまったく違ってきます。さきほど述べたように、指摘を受けることは本人だけではなく、周りの人の勉強にもなるのです。ですから、自他への指摘を有り難く受け取る人には、多くの知識を吸収する道が開けてきます。それが学生の本分であるとも言えるでしょう。逆に「傷つく」と受け取る人は、自分で自分の学習の可能性を閉じてしまうのではないのでしょうか。みなさんは「傷つく」といういわば自己愛的な感情から、成長、進歩のための絶好の機会を避けてはいけません。

自分だけが分かっていないという誤解

学生のみなさんの中には、教員から指摘を受けることだけではなく、授業のときなどに教員から質問を受けることにも消極的、回避的な人が多いように思います。「授業中教員に発言を求められるのは嫌だ」、「発言なんかして目立ちたくない」、「授業中はおとなしくしたい」というわけです。その背景にある心理として、「自分はいまうまく話をしたり答えたりできないのではないか」、「間違ったことを言うてしまうのではないか」、「自分の無知や勉強不足をさらけだしてしまうのではないか」、結果として「恥ずかしい思いをするのではないか」という不安があるようです。

学生は、このような不安が自分だけに降りかかっているようにとらえがちです。しかし、数多くの学生に接している私から見ると、ほとんどの学生が大なり小なりそのような不安をもっています。これは、自分だけが分かっていないという誤解、誤認に基づくものでしょう。もちろん学生には、分野による得手・不得手や、勉強量による知識の多少という違いはあるのですが、あなただけではなく、どの学生も分からないことだらけで、不安をもっているのです。だからこそ、大学で学ぶ意義があるというものでしょう。

分からないことを恥ずかしがらない

昔から「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」という格言があります。「知らないことを人に聞くとその場は恥ずかしいが、聞かないで知らないまま過すと一生恥ずかしい思いをしなければならない」という意味です。誤りを指摘されることも、人前で当を得ない発言を行うことも、いつかは恥ずかしいことかもしれませんが、貴重な体験になります。つまり、教員からの指摘や助言を受け、演習形式の授業などでは他の学生からの指摘も受け、自分の考えや意見の是非・適否を検証されると同時に、新たな知識が付与されます。今後同じ間違いもしなくなります。それが人から教わるという意味での学ぶということなのです。

分からないことを大切にす

また、少し勇気は必要でしょうが、分からなければどういうところが分からないのかを人前で正直に話していいのです。何も恥ずかしいことではありません。自分が何を分かっていないかを見つめる謙虚さが、分かろうとする方向へ人を前進させます。それが学習や研究の基本・出発点になります。ただけないのは、自分を取り繕うために、あるいはその場をやり過ごすために、知っているつもりをする、知ったかぶりをする、生半可な知識でもっともらしいことを言うことなどです。それは、不誠実で、学習や研究とは相容れない姿勢です。

みなさん、分からないことを恥ずかしがる必要はありません。むしろ分からないことを大切にしましょう。なぜなら、ややこしい言い方になりますが、分からないことを分かることが、最終的に分かることにつながるからです。

基礎・基本がなぜ必要か



基礎教育センター教授 田中 正一

2006年におけるOECDのPISA学力調査で、我が国の子供たちの学力世界ランキングが示されました。その中で「総合的読解力」が他の先進諸国と比較して低いことがわかりました。(2009年の調査では順位が上がる。)

「総合的読解力」とは、「情報を取り出し」、「解釈」、「熟考・評価」、「論述」する能力のことです。この能力は現代社会で生きていくための必須条件です。さらにこれらを支える力は、基礎・基本です。これから社会人としてキャリアを積んで生きていくために、大学で何をどのように学ぶかは、極めて重要なことです。

1 キャリアが必要

(1) キャリアとは

文部科学省では、「キャリアとは、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねである。」と言っています。しかし、その定義がとらえにくいあなたに、金井壽宏氏の著書である「働く人のためのキャリア・デザイン」でキャリアを易しく説明しているので、その一部を要約して紹介しよう。

馬車で旅することを思い浮かべてほしい。長旅の行先で岐路にさしかかることもあり、最終的にどちらに行くか自分で決めなくてはならない。振り返れば車輪の轍わだち（車が通って道に残した車輪の跡）が残っている。自分がこれまでどのような轍をつくってきたのか。これからどのような轍をつくるのか。この轍がキャリアに例えられる。その馬車の御者（操縦者）こそキャリアを歩むあなたです。

(2) 自己の人生

しかし、自分の人生をどのように送るかは、今は全く考えられないとあなたは思うでしょう。でも、近い将来のこと、例えば、どの会社に就職するか、入社して何をしたいか、いつ頃一人前になりたいのかぐらいは考えたことがあるでしょう。なりたい自分のために何をするか。どうプランニングするか。そのプランは通過点で修正があることもありますが、自己と社会を吟味して、常に自分の意思で決断していくのです。これがキャリア・デザインです。キャリア・デザインについて金井氏は、「人生の節目節目でなにをするかが大切だ。」と述べています。

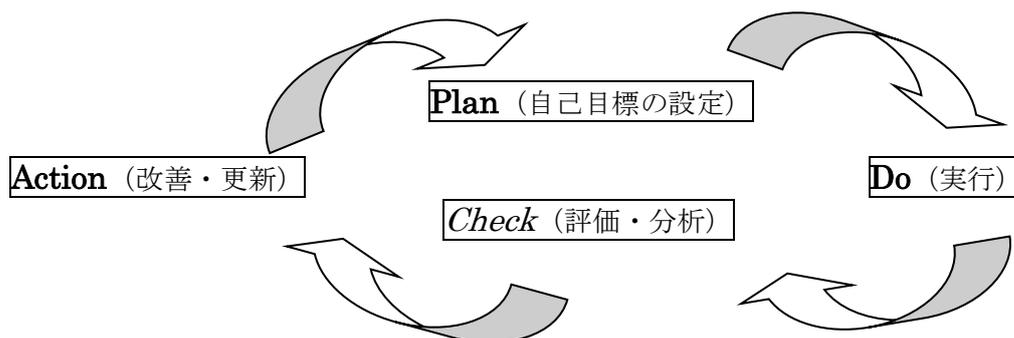
2 具体的にどうするのか

キャリアを具体的に積むためには何が必要か。

(1) P・D・C・Aサイクル

物事を始める際には、必ずプランを立てますね。自分が実行できるプランを立てましょう。できれば詳細にプランニングすることが良いでしょうね。そのプランができれば実行です。予定どおり実行できたかをチェックします。どの程度プランを実行できたか。自己の目標にどの程度到達できたかです。もし納得できないものであれば改善して次につながるアクション（改善）を起こさなければなりません。仮にうまくいったとしても必ず改善点はあるはずで。これらは、一連のサイクルとなり、自己の到達目標に近づいて行きます。

P・D・C・Aサイクル



(2) 自分はこれから何をすべきかがわからない

今、自分が何をすべきかは、まず自分でよく考えることです。何が不足しているのか、何でつまづいてしまったのか等をノートに書き出してみることです。次になぜ問題となったかを分析し、どうすればその問題を改善できるかじっくりと考えてみると、いくつかの方向性が見いだされます。それらの方向性の中で自分が実現可能な策を選択してはどうでしょうか。

(3) 大学は教養を身につけるためにある

大学は、教養として「専門の基礎」、「幅広い分野の知識」「人間理解を深める教養」を身につけるためにあるのです。自分自身で学ぶものを探す所です。自ら思考し、判断し、行動する過程を学ぶところでもあります。

(4) そのためには基礎・基本が必要

その教養を身につけるためには、基礎・基本が必ず必要です。基礎とは、「そのことが身につけていなければ次の学習の段階へは進めない。」ということです。基本とは、「ある事項・内容を理解するためのよりどころとなるもの。」です。すなわち、木の根を基礎、幹を基本ととらえてはどうでしょうか。基礎・基本ができて木は大きく成長するのです。

(5) 基礎・基本が十分でない

その基礎ができていないと次に進めません。基本がなければ発展的に考えることが難しいでしょう。基礎・基本はそれほど重要なのです。大学での教養を高めるためには、基礎・基本は欠かせません。

(6) そのためには

今、基礎・基本が不足していると考えているあなたにとって、徹底して基礎・基本を学ぶことが必要なのです。学びには忍耐が必要です。継続して学ぶことで基礎・基本が着実にあなたの身につけてきます。

(7) チャンスはどこにでもある

あなたがその基礎・基本をどのように学ぶのか悩んでいるのであれば、受講している講義の先生や「学習支援センター」などに相談してはどうでしょうか。早い段階で学び方のコツを教わることは基礎・基本の力を向上させるために極めて有効です。

「学習支援センター」でも多くの先生があなたを待っています。

(8) 良き師、良き友を見つけよう

大学で教養を身につけると同時に大切なことは、良き先生と出会い、良き友を持つことです。先達に学び、友とのコミュニケーションによって、人間としての成長が期待されます。大学で学ぶことは社会人への第一歩です。

以上の説明で、基礎・基本がいかに大切かわかりましたか。今、あなたが何かしてみようと思えば、この場で直ぐに行動すべきでしょう。

.....

ノーベル物理学賞受賞者の小柴昌俊氏が若者に向けたエッセイ

小柴氏は「カミオカンデ」で超新星爆発からのニュートリノを世界で初めて観測されました。「ニュートリノ天文学」という新学問分野を切り開き、2002年ノーベル物理学賞を受賞しました。

以下は、朝日新聞の「朝日求人」で氏が「負けられないよ」という見出しで、若者に語った内容を抜粋したものです。

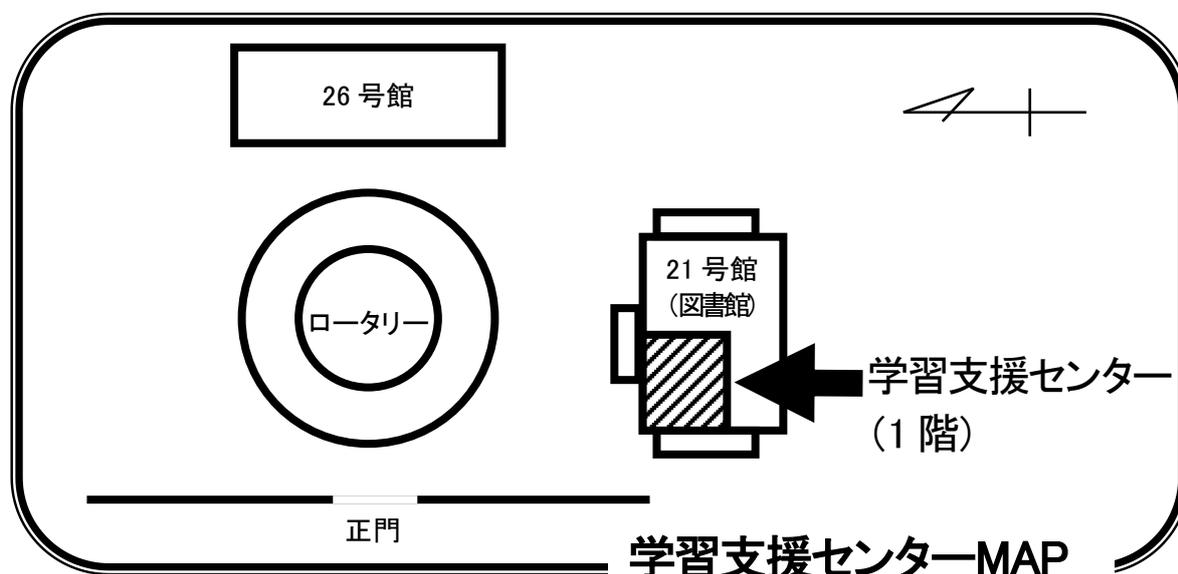
中学1年の時、小児マヒにかかり、退院後リハビリを続けていたが、バスのステップを上がれず片道4キロの通学路を徒歩で行かなければならなかった。人っ子一人いない田舎の通学路で転んで、人に助け起こされるまで1時間半も起き上がれず、みじめでしたよ。「こんちくしょう。こんちくしょう。」と言い続けていた。私はこの経験で、本気にならなければだめになると強く思い、一人で筋肉を動かし続けたのです。右手に後遺症は残ったけれど、「なにくそ」という本気が自分の人生を変えていくんだと学びましたし、それは自分を信じる力になったとも言えますね。

高校時代、寮で入浴していたら、湯気にかすむ向こうから物理の先生と先輩の声がする。「小柴は理科なんて無理だ。物理など入れるはずがないよ。」と。これを耳にしたとき、とにかく猛烈に悔しかった。・・・気持ちに火が付くと、本気になるんですね私は。東大の物理は難関で、上位1割くらいの成績でないと受からない。それでもやってやろうじゃないかと。悔しさから生まれるエネルギーは大きいね。

ついていないとか、大きく後れをとったという状況は気持ちに負荷がかかるわけで、あせりながらも本気への集中力が増していくんです。その時に逃げてしまったり、人のせいにするのは残念ですよ。自分が本気になる機会を失ってしまうわけだから。一度でも二度でもいい、執拗に自分の本気にたどり着け、と私は言いたいですね。

学習支援センターのご案内

- 学習支援センターは 21 号館（図書館のある建物です）の 1 階にあります。図書館に入ると、右側にすぐ学習相談室があります。
- 利用時間は、専任チューターが（10:00-18:00）、各学科担当教員が昼休み（12:10-13:05, 12:15-13:10）および夕方（16:20-17:20）となっています。



- 予約は不要です。下の担当表を参考に質問したい先生を気軽に訪ねてください。
- もちろん、支援センターにいる先生の専門に関係なく利用できます。
- 誰に相談したらよいかわからないときは、どの時間でもかまいませんので、来室して相談してください。適切な先生を紹介します。
- TAの時間には、コンピュータの操作やプログラミングについて相談できます。
- 授業の復習の相談場所、あるいはちょっと便利な自習室として、学習支援センターを利用してください。
- 学習支援センターは、前期および後期の授業期間に開室します。

平成25年度後期 学習支援センター担当表

曜日	月	火	水	木	金
10:00-18:00	五十嵐（数学）			五十嵐（数学） 杉山（物理）	五十嵐（数学） 杉山（物理）
12:15-13:05	渡部大（数学）	江原（化学）	田中（化学）	松川 （自分を変える）	
12:20-13:10	斎藤（英語）		林（生活）		
16:20-17:20	浜名（化学）	山路（英語）	TA （資格・プログラ ミング）	田中 正一 （教職・相談）	

詳細については、学習支援センターのwebサイトをご覧ください。

<http://www.sit.ac.jp/lsc/index.html>